

関西国際大学コミュニケーション研究所  
コミュニケーション研究叢書 第6集 (2008年2月)

英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け  
*Students' Needs and Motivation for Learning English Pronunciation*

中西 のりこ  
Noriko Nakanishi

# 英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け

中西のりこ<sup>1</sup>

Noriko Nakanishi

## 1. はじめに

社会の国際化、グローバル化により、英語は必ずしも英語母語話者(NS)とのコミュニケーションの場面だけではなく、非英語話者(NNS)間のコミュニケーションの手段としても使われている。それにともない英語教育現場でも、英語に限らず異なった言語を母語とする話者間でのコミュニケーションの場面を意識した「国際語としての英語(EIL)」の習得を目標とする動きが広まりつつある。

例えば発音の分野では、Jenkins (2000)が国際的コミュニケーションの場面で *intelligibility* に支障をきたしがちな要素とそうではない要素とを区別する *Lingua Franca Core (LFC)* を提案している。NNS の話す英語の発音を全て NS 発音に置き換えさせようとするのではなく、NNS 間で *intelligibility* に問題が起きがちな母語の影響 (*transfer*) に指導の焦点をあてるということだ。LFC の基本的な考え方では、学習者が異なった母語話者と英語でインタラクションを重ねるにつれ、自分の発音のうち相手に理解されにくい要素をより理解されやすい形に近づけようとする、とされている。

しかし、上記のように LFC 習得の意欲が高まることが期待できるのは、教室内に母語の異なった英語学習者が存在することが前提となっている。そのため、日本のように学習者の大半が母語を同じくする学習環境では、意欲の高まりを期待できないばかりではなく、*transfer* を含んだ発音の方が相手に理解されやすいため母語の影響を受けた要素がそのまま定着し、*fossilization* が起こりやすい。Jenkins (2000)では、このような事例をいくつか取り上げ(p.62, 181, 186, 191-2, 215)、”... the problems in relation to monolingual classrooms ... will remain for another day”(p.193) と述べている。

本稿では、このような日本の教育現場の現状をふまえ、学習者の英語発音に対する意識を探る。

---

<sup>1</sup> 本研究所共同研究員（関西国際大学非常勤講師）

## 2. 実験

### 2. 1 目的

日本の大学・高校で英語を学習する学生、生徒の英語発音の能力と発音学習に対する意欲を探る目安として、

- ① 自分の英語発音をどのように評価しているか
- ② 「ネイティブスピーカー」のような発音の習得をどれほど望んでいるかについて調べ、英語発音学習の動機の高さを左右すると考えられる要因として、
- ③ 今までに英語の発音に通じずに困った経験をどれほどしたか
- ④ 「日本人らしい英語」を話すことについての意識
- ⑤ 英語を専攻する学部、学科に所属しているかどうか
- ⑥ TOEIC, TOEFL などのスコアで示される客観的な英語力

を取り上げ、これら①~⑥の関連の有無を調べる。研究者・指導者の立場から「何を教えるべきか」を考えるよりむしろ、学習者の立場から「現状をどう評価しており、今後どうしたいのか、また、それを左右する要因は何か」を探ることを第一の目的とする。

### 2. 2 方法

461人の学生、生徒を対象に2007年秋に質問紙調査を行なった。質問紙は村田(2008)を参考に、それぞれの項目について「1=非常に思う(非常によくある)」から「5=全く思わない(全くない)」の5段階の中から該当するものを選ぶ形式をとり、23項目の質問のうち表1にあげる4項目について分析を行なった。

はじめに、回答者の発音についての全体的な意識を探るため、質問紙の4項目に対する5段階の回答の分布を調べた。次に発音学習についての意識に影響を及ぼす要因を探るため、上記4項目に対する回答と英語力の相関を調べた。最後に4項目それぞれについて、回答者が語学を専門とする学部にあるかどうかによって回答の傾向が異なるかを調べるため、カイ2乗検定を行ない、グループ間で有意差が見られた項目について、どのように異なっているかをさらに詳しく調べた。

表1 英語を話す能力に関するアンケート (抜粋)

		1	2	3	4	5
1	自分の英語の発音はネイティブに近いと思いますか?	非常に思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
2	ネイティブの発音に近づけたいと思いますか?	非常に思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
3	自分の英語の発音に通じずに困った経験はありますか?	非常によくある	よくある	時々ある	めったにない	全くない

23	日本人は日本人としての特徴のある英語を話すべきだと思いますか？	非常に思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
----	---------------------------------	-------	------	-----------	--------	--------

回答者の所属する学校・学部の内訳を表 2 に、統一テストスコアの TOEIC 換算値の分布を図 1 に示す。回答者の客観的な英語力の目安としては、TOEIC<sup>2</sup>、TOEIC Bridge、TOEFL についての回答を集計し、TOEIC Bridge<sup>3</sup>、TOEFL<sup>4</sup>については換算式に基づいて TOEIC スコアに置き換えた数値を使用した。

表 2 回答者の内訳

	英語を専門とする学部・学科	英語を専門としない学部・学科
私立 A 大学	60 人 (51 人)	119 人
私立 B 大学	—	101 人 (89 人)
公立 C 大学	134 人 (44 人)	—
公立 D 高校	47 人	—

(カッコ内) : テストスコアが得られた回答者数

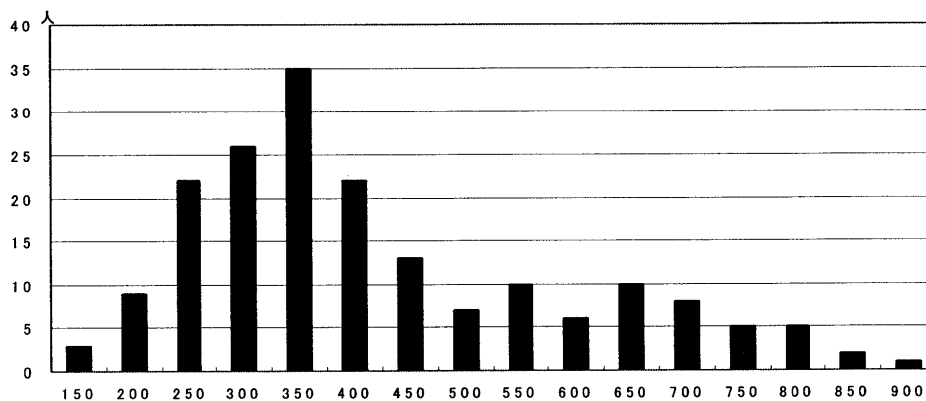


図 1 TOEIC 換算スコアの分布 (n=184)

## 2. 3 結果

### 2. 3. 1 全体像

質問紙の 4 項目に対する 5 段階の回答の分布を図 2 に示す。これによると、

<sup>2</sup> TOEIC IP を含む。

<sup>3</sup> (財)国際ビジネスコミュニケーション協会

<sup>4</sup>  $TOEIC = (TOEFL - 296) \div 0.348$

- ① 「自分の英語の発音はネイティブに近いと思いますか(NS 発音自己評価)」という質問については、全体の 80%弱の回答者が自分の英語発音が NS 発音に近いとは「思わない」または「全く思わない」と回答した。
- ② 「ネイティブの発音に近づけたいと思いますか(NS 発音習得意欲)」の項目では、80%以上の回答者が自分の発音を NS 発音に近づけたいと「思う」または「非常に思う」と回答した。
- ③ 「自分の英語の発音に通じずに困った経験はありますか(intelligibility 困難の経験)」についての質問では、70%弱の回答者が自分の英語発音に通じずに困ったことが「時々ある」「よくある」「非常によくある」と回答した。
- ④ 「日本人は日本人としての特徴のある英語を話すべきだと思いますか(Japalish 発音の意識)」については、50%強の回答者が日本人は Japalish 発音で話すべきだとは「思わない」または「全く思わない」と回答した。

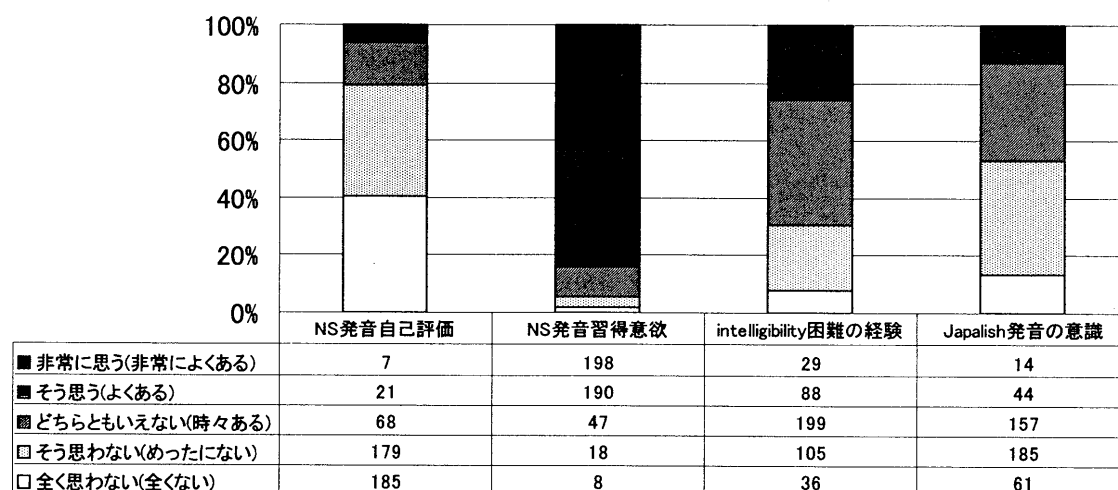


図2 英語発音に関する学生の意識 (n=461)

### 2. 3. 2 4項目と英語力の相関

質問紙の4項目について、回答間の関係を調べるためにピアソンの相関係数を求めた(表3)。その結果、1%水準で有意な相関が見られたのは「NS 発音習得意欲」を含むペア間のみで、「intelligibility 困難の経験」と「NS 発音自己評価」との間では正の相関、「Japalish 発音の意識」との間では負の相関が見られた。その他の組み合わせについては、有意な相関は見られなかった。

表3 各項目間の相関係数 (n=461)

	1.	2.	3.	23.
1. NS 発音自己評価	1.00			
2. NS 発音習得意欲	.14**	1.00		
3. Intelligibility 困難の経験	-.01	.30**	1.00	
23. Japalish 発音の意識	.02	-.13**	.02	1.00

\*\*;  $p < .01$ 

回答者の客観的な英語力と4項目の質問に対する回答との相関については、「NS 発音自己評価」との間以外には有意な相関が見られなかった(表4)。

表4 英語力と各項目の相関係数 (n=184)

	TOEIC 換算値
1. NS 発音自己評価	.20**
2. NS 発音習得意欲	.18
3. Intelligibility 困難の経験	.02
23. Japalish 発音の意識	-.02

\*\*;  $p < .01$ 

### 2. 3. 3 所属学部による回答の違い

回答者が所属する学部によって「英語専攻(n=241)」と「非英語専攻(n=220)」のグループに分けカイ2乗検定を行なった結果、「NS 発音習得意欲( $\chi^2=86.6$ )」と「intelligibility 困難の経験( $\chi^2=67.1$ )」に対する回答についてグループ間で有意な違いが見られた( $df=4$ ,  $p < .01$ )。さらに、これら2項目について学部別の回答の分布を調べると、「NS 発音習得意欲」について「非常に思う」、「そう思う」と回答した割合は英語専攻グループでは95%だったのに対して、非英語専攻グループでは73%となった(学校、学部別の回答割合を図3に示す)。また、「intelligibility 困難の経験」についての質問では、「非常によくある」「よくある」「時々ある」という回答が英語専攻グループでは84%だったのに対して、非英語専攻グループでは53%となった(学校、学部別の回答割合を図4に示す)。

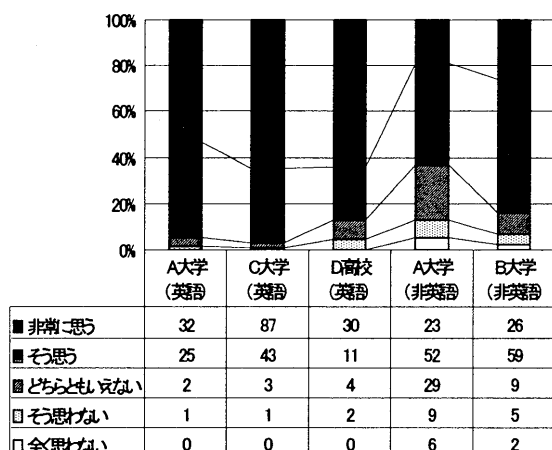


図3 NS 発音習得意欲 (人)

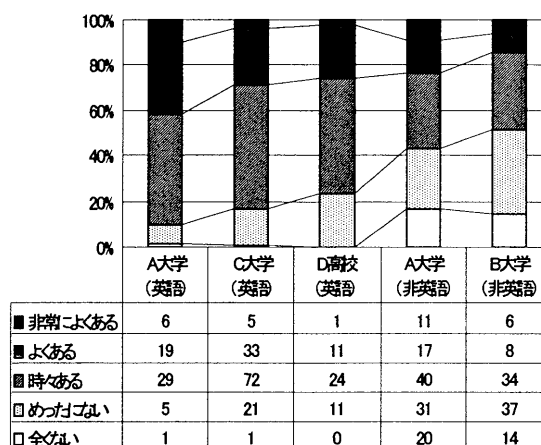


図4 Intelligibility 困難の経験 (人)

### 3. 考察

#### 3.1 NS 発音自己評価

今回の調査対象となった学生・生徒の8割近くが自分の英語発音がNS発音に近いとは思っていないことが明らかになった(図2)。理由として、学校教育の中で発音の指導が十分に行なわれていないことや、モデルとなるNSが身近にいないので練習の機会も少ないということが考えられる。一方で、臨界期を過ぎた学習者がNS発音を完全に獲得する可能性は低いという報告が多数あることから、NS発音を自己評価の基準にすること自体に無理があるともいえる。ただ、発音自己評価とTOEIC換算スコアとの間に弱い正の相関が見られたこと(表4)から、統一テストなどで測られる英語力が高い学生ほど自分の発音に多少なりとも自信を持っている、という傾向がうかがわれる。

英語を専門とする学部・学科グループと非英語専門グループの間でNS発音自己評価に有意な差が見られなかったことについては、二通りの解釈ができる。つまり、「学生が英語を専門に学習しても、非専門の学生と比較してNS発音により近い発音で話せるようになるとは言えない」と受け止めるか、「英語を専門とする学生はNS発音に対する理想が高く自己評価の基準が厳しくなるため、実際にはある程度できていても、結果として自己評価は非英語専門の学生と大きな違いが見られなくなる」と受け止めるか、ということだ。ここで、英語専攻グループのTOEIC換算平均値が非専攻グループより高いことと、前述のようにTOEIC換算スコアと自己評価の間に多少なりとも相関があることを考え合わせると、上の解釈のうち後者「自己評価の基準の高さ」を要因とする方が妥当と考えられる。

以上、「自分の英語の発音はネイティブに近いと思いますか」という質問に対する回答を

<sup>5</sup> 英語専攻グループ (n=95, M=508.4, sd=190.0)  
非英語専攻グループ (n=89, M=376.5, sd=86.7)

中心に明らかになったことを整理すると、

- 教室内外で発音の練習をする機会の確保
- 発音の評価基準を NS 発音とすることの妥当性

という問題が浮かび上がった。特に発音の評価基準については EIL など NS 発音以外を目標とすることも考えられるが、今回の調査で EIL の可能性について質問すると他の項目に対する回答に影響が及ぶことが懸念されたため、今後の追跡調査で明らかにする必要がある<sup>6</sup>。

### 3. 2 NS 発音習得意欲

自分の発音が NS に近いとは思わない学習者が大半を占める中でも、8割以上の回答者が習得を諦めるわけではなく、依然として高い意欲を持っている(図2)。質問紙の4項目間で有意な相関が見られたのがこの「NS 発音習得意欲」を含むペア間のみだったことから、習得意欲に影響を及ぼす要因には「NS 発音自己評価」「intelligibility 困難の経験」「Japalish 発音の意識」が関係していることが分かった(以下、習得意欲との相関については、表3を参照)。

まず、自己評価と習得意欲の間に弱い正の相関が見られることから、発音習得の意欲が高い学生ほど自分の発音に多少なりとも自信を持っており、自己評価が比較的高い学習者ほど NS 発音により近づきたいという意欲を持っている、といえる。このことは発音学習導入時の動機付けの重要性を示している。

2つ目の「intelligibility 困難の経験」の項目との間にも弱い正の相関が見られた。発音を通じずに困った経験がある回答者ほど NS 発音習得の意欲が高いということで、このことは、Jenkins(2000)で示されている“... EIL speakers are likely to resist such attempts (as encouraging learners to modify the phonological habits of a lifetime) if they do not themselves perceive the need for them. (p.113, カッコ内筆者加筆)”とも合致している。冒頭で述べたように異なった言語の母語話者とのコミュニケーションの機会が少ない日本でも、意思疎通の困難が発音習得の意欲とある程度は結びついていることが明らかになった。

Japalish 発音に関する質問と NS 発音習得意欲の間には負の相関が見られたが、予想に反して、決して強い相関ではなかった。NS 発音に近づきたいと思う度合いが強い回答者ほど Japalish 発音に否定的な意識を持っているということだが、弱い相関しか見られなかったことから、「欧米色に染まるか日本人としてのアイデンティティを守るか<sup>7</sup>」のように英語発音学習を二元論的にとらえる学習者ばかりではないということが分かった。

英語専攻の学生グループと非英語専攻の学生グループの間で、NS 発音習得意欲につい

<sup>6</sup> EIL の意識や学校での発音指導などの項目も含めた追跡調査は、公立 D 高校の生徒を対象に 2008 年 2 月下旬に実施を予定している。

<sup>7</sup> Japalish 擁護論については、鈴木(1991, 1999, 2003)、田中(2002)、渡辺(1989)を参照。



て有意な違いが見られたこと(図3)は当然とも言えるが、非英語専攻グループの27%、英語専攻グループでも5%の学生が「NS発音に近づけたいか」という質問に対して「そう思わない」または「全く思わない」と回答したことは心に留めておく必要がある。特に大学で英語を専門としていない学生にとって、英語の授業は卒業に必要な単位を取得することが第一の目的であるケースがあるため、自発的な動機がない学生にNS発音の練習を強要することには問題がある。発音練習には心理的な抵抗を感じる学習者がいることも考慮し適切な動機付けを促した上で、学生の意欲に応じた指導をすることが求められる。

「ネイティブの発音に近づけたいと思いますか」という質問に対する回答の傾向から見出された今後の課題として、

- 発音学習の動機付けのあり方
- NS/Japalish発音のような二元論ではない発音モデルの設定

があげられる。また、「NS発音自己評価」の項目と同様に、回答者が何を基準に「NS発音」と見なしているのかは今回の調査で明らかになっていない。全体の8割以上もの回答者がなぜ「NS発音に近づけたい」と考えているかも含めて、今後の追跡調査で明らかにしていく。

### 3.3 Intelligibility 困難の経験

全体の7割近くの学習者が、英語の発音が通じずに困った経験をしたことがあることが分かった(図2)。一方で、困った経験が「めったにない」「全くない」と回答した学生については、いくつかのケースが考えられる。つまり、①日本語以外の母語話者を相手に話をして発音によるintelligibilityの問題がなかったのか、②日本のほとんどの教室内でのコミュニケーションの場面で見られるように、話し手と聞き手が同じ日本語母語話者なのでカタカナ発音でも問題なく通じてしまったのか、③元々英語を使って自分の意思を伝えるという機会自体がなかったのか、に分けて考える必要がある。

ここで、「困難の経験」は「NS発音自己評価」との間にも「TOEIC換算スコア」との間にも有意な相関が見られなかったこと(表3,4)から、上記①の可能性は低いと考えられるので、「困った経験がない」と回答した学生が全体の3割もいたことは決して喜ばしいことではない。これは「発音に通じずに困った」と気づく以前の問題で、意思を通じさせようとする機会さえ与えられていない学生は、前項で述べた学習動機を高める要素となり得る「困難の経験」を得ることができないということだ。このことは、英語専攻グループと非英語専攻グループの間で「困難の経験」について有意な差が見られたこと(図4)からも察することができる。

以上、「自分の英語の発音に通じずに困った経験はありますか」という質問への回答から得られる問題点として、

- 異なった言語を母語とする話者とのコミュニケーションの機会の確保があげられる。

#### 4. 今後の研究課題

前章「考察」で見出された問題点は、

- 教室内外で発音の練習をする機会の確保
- 発音の評価基準を NS 発音とすることの妥当性
- 発音学習の動機付けのあり方
- NS 発音/Japalish 発音のような二元論ではない発音モデルの設定
- 異なった言語を母語とする話者とのコミュニケーションの機会の確保

の5つとなった。重複する部分を整理し分類すると、“Standard の問題”、“Motivation の問題”、“Opportunity の問題”となる。

“Opportunity”については、冒頭で述べたとおり monolingual classrooms が大半を占める日本の英語教育現場で考えられる手立てには限りがあるが、“Standard”と

“Motivation”については引き続き研究を進める余地が多く残されている。学習者自身が「どんな英語発音を、なぜ」習得したいのかについて追跡調査を実施し、研究者・指導者の立場からだけでなく学習者の視点も取り入れた発音教育のあり方を探ることを今後の研究課題とする。

#### 参考文献

Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford.

McKay, S. L. (2002) *Teaching English as an International Language*. Oxford.

Murata, J. (2008) What kind of English – for Japanese learners of English in the age of English as a Lingua Franca? 『神戸外大論叢 第59巻』

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEIC Bridge と TOEIC テストの比較」

<http://www.toEIC.or.jp/bridge/about/compare/> 2008,1,25 閲覧

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEIC テスト DATA&ANALYSIS」

<http://www.toEIC.or.jp/toEIC/data/pdf/DAA2002.pdf> 2004,1,1 閲覧

鈴木孝夫(1991)「日本の英語教育への私のメッセージ」『英語教育現代キーワード事典』  
安藤昭一編 増進堂

鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店

鈴木孝夫(2003)『アメリカを知るための英語、アメリカから離れるための英語』文藝春秋

田中克彦(2002)『ことばと国家』岩波新書

渡辺武達(1989)『ジャパリッシュのすすめ - 日本人の国際英語』朝日選書